

7章 半世紀の革命

(1)

七月に入った翌日から一週間、関東地方には梅雨前線がはびこり、ぐずついた天気が続いた。その間、雅人はフルムーン企画の最終調整のため、販売エリア各支店の責任者を集めての販売戦略会議やセールスマニユアルの手直しなどに忙殺された。

土曜日の夜以来、七海からはなんの音沙汰もない。

しかし雅人にとって連絡がないのは幸いだった。長嶺らの血脈に染まる七海のイメージを心の隅に追いやり、目先の仕事に没頭できたからである。

美悠も福田の口止めを忠実に守り、七海や事件の話題は避けている。

梅雨前線が日本海に抜けた水曜日の昼、雅人がランチに利用しているファミレスに則尾がひよっこり顔を出した。いつものひょうきんさはなく、妙に悄然とした様子である。

「どうしたんですか？」

「F T課に行つてミュウちゃんからこの店にいるはずだって聞いたからさあ。きょうは紀行文の修正の打合せや写真の選定があつて午前中からずっと手塚のところに行ったんだ」

「いよいよパンフレットが動きますね」

「今月中に校了して来月の盆明けには支店へ配送する予定だって聞いたよ」

「こっちもそれに合わせて販売戦略や支店との調整に怒涛の忙しさですよ」

「だろうな、うまく売れてくれればいいんだけど……」

「則尾さんにしては弱気ですね。不安材料でもあるんですか？」

「この企画に関してはないけどね……」

向かいのシートへ物憂げに座った則尾は、ウエイトレスにランチを注文した。

「気になってるのは福田のことなんだ。今週に入ってから連絡が取れなくてさ。それまでは毎日あつちから連絡をくれたのに」

「福田さんは例のホテルへ調査に行つたんですか？」

「うん、あの翌日から毎日行っている」

「一週間も？」

「そのはずだけど、月曜からずっと連絡がないんだ。こっちから連絡を入れてみたんだけど圏外か電源が入ってないっていうアナウンスでさ」

「電波が届かない場所へ移動したんじゃないですか」

「そうであればいいんだけどね……ところで大前くん、S T Bの企画室長からはなんか連絡があつた？」

「ありませんよ。オレからも連絡していませんし……」

「そうか」

「今回の事件は彼女とは無関係だと思えますよ」

雅人はおずおずと則尾の反応をうかがったが、彼はまるで頓着せず、

「そのことはいいんだけど……福田はどうしちやつたのかな」

「福田さんは現地でなにを調べていたんですか？」

「例のホテルに出入りする人間を調べているってことだった」

「めばしい人は見つかったんですか？」

「一人だけ……」

「誰なんですか？」

則尾は「うん……」といいよどみ、

「竹崎由布子を見たらしい」

「え！？」

「夜だったからはつきりとは見えなかったようだけどね」

「見間違いつて可能性もあるんですね？」

「まあね。それでさあ、福田のことが心配だからボクも行ってみようと思っているんだ」

「例のホテルへ？」

「直接ホテルへ行くわけじゃない。福田はホテルから少し離れた喫茶店から見張っていたようだから、とりあえずボクもそこへ行ってみるよ」

「大丈夫なんですか？」

「わからないけど……このまま手をこまねいているわけにもいかないしね」

「警察へ連絡したほうがいいんじゃないですか？」

「それは最終手段だよ。まずは現状を確認しないと」

「土日ならオレも一緒に行けますよ」

その週は土日返上の出社予定だったが、雅人は頭のなかで仕事のやりくりをつけた。

「忙しい最中なのに無理しなくていいよ」

グラスの水をぐくりと飲んだ則尾はなにかを含んだ目で雅人を見た。

「まあ……ボク一人よりも、大前くんが一緒のほうが安全だとはいえるけどね」

「則尾さん、本当は一緒に行ってもらいたいんでしょう？」

「そんなことないよ。危険が伴うかもしれないし……」

「だからオレと一緒にいくんですよ。もし則尾さんになにかあったら今回の企画にも影響しますからね」

「お目付け役ってわけ？」

「当然ですよ。今回の企画が滑ったらF T課の存続だって危うくなるんですから」

そのとき則尾のランチが運ばれてきた。

「それじゃあ、あと二日、連絡がないようだったら、金曜の夜に大前くんへ連絡するよ」
やや元気を取り戻した則尾はランチにかぶりついた。

二日しても福田からの連絡はなかった。

土曜日の午前中、雅人は則尾と一緒に総武線の快速で千葉駅まで行き、そこで内房線に乗り換えた。

梅雨が明けてしまったかのように朝から強靱な陽射しが注いでいる。館山方面たてやまに向かう内房線には、海へ行くらしい行楽客の姿がちらほらあった。

五井駅で降り、地図を頼りに海と反対側の出口から商店街を歩くと、十数分で人工的な建物は姿を消し、房総の山なみを望む水田地帯が広がった。街と田園を二車線の車道が隔て、その車道とぶつかる辻の左手二百メートルほどの山側に、プロバンス風の荘厳な建物が見えた。

道路から山側への広大な敷地を占領した建物は、中央に突き出た宿泊棟らしい十階程度

の高層棟と、それを支える三、四階の低層棟が、まわりの風景とは異質な南欧リゾートの景観を醸し出している。オレンジ色の瓦をさりげなくあしらった低層棟は、さながら室内グランドでもありそうな奥行きと幅をもっている。敷地のまわりは建物と同じ色で塗られた3mほどの高さの外塀で囲まれ、その内側に等間隔で植えられたフェニックスのような南国植物の葉が、海からの風に揺れている。

辻で立ち止まった則尾は額の汗を拭いた。

「でかいな。プロバンス風を気取った建物であんなでかいのは見たことがないよ。内部にいろいろな施設があるようだから、あのくらいのでかさが必要なんだろうな……ところで福田が監視所代わりをしていたという店ってあれかな？」

辻とホテルのほぼ中間あたり、ホテルとは反対の道路脇にティーラウンジらしい看板が見える。

「則尾さん、あそこじゃあホテルのエントランスからだいぶ離れてますよ」

「でも、ほかにそれらしい店はないし、とりあえず行ってみよう」

則尾は看板に向かって歩きはじめた。

道路に面した店は一階を駐車場にした二建ての店舗だった。そこまで歩き、先をうかがったが、飲食店らしい看板も建物も、ほかには見あたらない。

「ちよっと距離はあるけど、窓際の席だったらホテルのエントランスぐらいい見えそうだ」
独り言のようにつぶやいた則尾は、さっさと店舗への階段を上がった。

ティーラウンジを名乗っていても、内部は食事メニューを中心にしたファミレスのような造りだった。奥の壁にはマンガ本がびっしりつまった本棚があり、タクシーの運転手などが時間をつぶすのに利用されているようである。昼食時間にはまだ早いためか、客は数人しかいなかった。

道に面した窓際の席にいた則尾は、ウエイトレスにコーヒーを頼んだあと、さりげなく確認した。

「先週だけど、長身でちよっとかっこいい感じの中年男性が何日かこの店に来たはずなんですけど、覚えてない？」

茶髪の若いウエイトレスはすぐに反応した。

「あのお客さんかな？ この先のホテルへ営業に来た広告代理店の人ですよね？」

《福田さんはそんな口実を使っていたのか》

則尾もすぐに事情を察し、

「その広告代理店の営業マンなんですけど、ずっとこの店のなかにいたの？」

「いえ、出たり入ったりしてましたけど……あの……お客さんのお知り合いなんですか？」

「ボクらはその人の後任の営業マンでね。彼からこの店のコーヒーも食事も美味いって聞いたもんだから」

ウエイトレスの表情がほころんだ。

「その客さまからも美味しいって褒めていただきましたよ！」

「じゃあボクらも営業の待機所に利用させてもらおうかな」

「ぜひどうぞ！」

その機嫌からすると、福田は一日に何品も注文する上客だったようである。

その日、二人は夜八時近くまで粘った。ずっと店にいるのも変に思われそうだと、二時

間おきぐらいに店を出て、ホテルのエントランス近辺まで歩き、それとなく様子をうかがう。それから少し先にある交差点まで歩き、反対側からホテルの周辺を観察し、しばらく時間をつぶしてから店に戻るパターンだった。

ホテルのエントランスは道に沿って横に広がった。道路との境にはフェニックスや南国風の樹木が高密度に植えられ、道路正面からは車寄せや内部が見えないように工夫されている。しかし二人が陣取った席からは、植物と外壁のわずかな隙をぬって、一瞬だが、車から降りる人の姿がうかがえた。

「ちらつとは見えますけど、こう遠くちゃあ誰だか判別できないですね」

雅人は、マンガ本に目を落とす則尾にいった。

「そうだな……」

顔を上げた則尾は大あくびをしながら、

「双眼鏡でも用意するか？」

「そんなもので覗いてたら店の人に怪しまれますよ」

「オペラグラスぐらいだったらなんとかなるんじゃないかな」

「福田さんが竹崎由布子らしい人を見たのは夕方でしょうか？」

「七時ぐらいだっついていった」

「それじゃあ日没後で、しかもこの距離ですよ。個人を確定するのは無理じゃないですか。

それに、たとえ彼女だったとしても、旅行代理店の経営者として親会社のホテル視察や営業の打ち合わせに来ることだってあるでしょう？」

「たしかにね。あのホテルの営業代理はSTBだろうし……まあ、偏見を持たないで見張ってみよう」

「則尾さんは長嶺会長の顔を知っているんですか？」

「経済誌の写真で見たことがある。それに北条エナジの社長もわかるよ」

「四季観光産業や北嶺観光開発の社員の顔は？」

「そりゃあ無理だ。写真のデータがないからね」

「じゃあ誰が出入りしているかわからないじゃないですか」

「でも福田はここから消えたんだ。たとえ自分の意思で移動したにしても、なにかをつかんだからに違いないよ」

「竹崎由布子が入り出していったってことですか？」

「それもあると思うけど……」

則尾は思いついたようにポケットから携帯電話を出し、福田のナンバーをコールした。

「やっぱり同じアナウンスだよ。一週間近くこの状態なんて変だ」

「拉致されたんですかね？」

「わからない。だからこうして福田と同じように見張っているんじゃないか」

「オレたちも危ないんじゃないですか？」

「その可能性は否定できないけど、今度は二人だし、それなりに注意もしているから、めつたなことはないと思うけど……」

「そうだといいんですけどね」

その日、ホテルへ来た車はタクシーを含めて六台あった。そのたび注意深く目を凝らしたが、スーツ姿の男や恰幅の良い中年夫婦の姿が一瞬見えただけだった。

夜の七時をまわり、太陽が没すると監視はお手上げである。二人は愛想のいいウエイトレスの声に送られ、痺れた尻をかばいながら店を出た。

(2)

翌日の日曜、二人は午前十時から監視をはじめた。

則尾はてのひらにすっぽり収まる小型のオペラグラスを用意してきた。

「これなら双眼鏡を使っているように見えないだろう？」

あっけらかんというが、エントランスに車が着くたび、目もとに手をかざす不自然な則尾の姿に、雅人はひやひやした。

午後になって雲が広がりはじめた。ランチの唐揚げ定食で腹が膨れた雅人は、マンガ本をぼんやりと見ているうちに夢の中へ落ちてしまった。

ふいに則尾の手が雅人の肩をたたき、夢うつつの意識に「来たぜ」という声が聞こえた。

「来たって、誰が？」

「断定はできないけど、たぶん……」

則尾はそういったきり、またオペラグラスを握りこんだ手を目元もとにあて、「車は駐車場へ行ったみたいだな」とつぶやいた。

「則尾さん、誰なんですか？」

「おそらく彼女だ」

「彼女って……竹崎由布子ですか？」

「それならボクにもわかるよ。今来たのは、たぶん……妹のほうだ」

覚めやらぬ雅人の意識に冷たい衝撃が走った。

「でも則尾さんは彼女の顔を知らないじゃないですか」

「知らないよ。でも雰囲気っていうかなんとなくそんなオーラみたいなものを感じたんだ」

「オーラって……そんな思い込みですよ」

懸命に則尾の直感を否定したが、次の言葉を聞いた瞬間、雅人は息を呑んだ。

「白いBMWだったけど……」

「BMW!？」

あからさまな反応に、則尾は「ふくん……」と口吻をもらし、上目で雅人を睨んだ。

「彼女の車か？」

「え、ええ……確かに白いBMWに乗っていますけど……」

「彼女の身長は？」

「則尾さんぐらいはあると思うけど……」

「百七十センチ弱か……ヒールを履けばドアマンと遜色ない身長になるな」

「長身だったんですか」

「まあね。それで髪の毛の長さや色は？」

「ロングでブラウン……」

「そうか……」

うなずいた則尾はふいに笑顔を繕い、

「でもさ、あんな高級ホテルに来る客はBMWぐらい乗っていてもおかしくないし、ブラウンの髪や長身は昨今の女性の特長だからね。断定はできないよ」

妙に自虐的ないいかたで雅人を慰めた。

しかしその一時間後、則尾の慰めは空しい気遣いに変わった。ホテルのエントランスから道路に出た白いBMWが店の前を横切った瞬間、雅人の意識は凍りついてしまった。

車の行く手を追っていた則尾が「どうだった？」と振り向く。

「たぶんそうですね……でも……」

竹崎由布子のケースと同様、STBの役職ならば営業商品であるホテルへ出入りしてもおかしくはない。しかしその論理に、目の現実へ抗えるほどの力はなかった。

雅人の脳裏に、七海の匂いと柔らかな唇の感触がよみがえった。

《これが夢だったら……》

気力を失った意識に、則尾の深刻な声突き刺さった。

「いよいよ覚悟しなけりやならないかもな」

「覚悟？」

「STBの社長に続いて室長まで出入りしているとすると、あのホテルはダイイングメッセージの場所に限りなく近い。福田の行方がわからない現状を考えれば、警察に報せるか、ボクらが乗り込むか、そのどちらかしかない。いずれにしても緊急を要する」

「そうですね……」

「どちらを選択するにしても覚悟がいる」

「ちよ、ちよっとまってください。まずオレが確かめてみます……」

「大前くんが？」

「はい、彼女に連絡してみます」

「なにを連絡するんだ？」

「オレたちがダイイングメッセージの場所を知ったことです」

その提案に、則尾はしばらく思索していたが、やがて「うん」と小さくうなずいた。

「その手もあるな。それを知らせることで、福田のことをどうこうしても無駄だと思わせる牽制になるかもしれないし」

雅人は自棄的な気持ちで七海の携帯電話を呼び出した。

——大前さんですか？

七海の声に車の音がかぶさっている。

「今、高速道路でしょう？」

——どうしてご存知なんですか？

「さっき市原の道で見ましたから、たぶん東京へ戻る途中だと思ったんです」
七海の言葉が途切れた。

「あなたが市原市の新近江グランドリゾートに来たのを見ました」

——……。

「すぐ近くのティーラウンジで見えました」

——……。

「先週、オレの知り合いがずっとここで見てたんです。お姉さんもホテルに顔を出したそうですね」

無言だった七海が悲しげな声でいった。

——大前さん……あと五分だけ待っていただけますか？

「なにを待つんですか？」

——それを五分後にご連絡します……。

「わかりました」といいかけたとき、電話が切られた。

「則尾さん、五分後にまたかけるそうですけど……」

「大前くん、すぐに出るぞ！」

則尾はすでにバッグを肩にかけて立ちあがろうとしていた。

「どうして？」

「なにいつてるんだ！ 急いで！」

伝票をつかんだ則尾は駆けるようにレジへ行き、「会計をお願いします！」と奥に向かって大声をあげた。

「ちよつと則尾さん、急にどうしたんですか？」

引きずられるように店を出た雅人は、駅の方角に早足で歩く則尾に追いつがった。

「やつらが来る！」

「え！？」

「わからないのか？ 五分の猶予はボクらにじゃなくて、ホテルにいるやつらへの連絡時間だ。店にいたらヤバイじゃないか」

《そうか！》

納得した雅人は積極的に歩調を速めた。駅前へと続く商店街まで来たとき携帯が震えた。

「則尾さん、彼女からですよ！」

歩みをとめた則尾が「とにかく出て！」と険しい表情で振り返る。慌ててONボタンを押し、携帯電話を耳につけた瞬間、思いのほか冷静な声が響いた。

——大前さん、お逢いしたいそうです。

「逢いたいって、誰がですか？」

——長嶺会長です。

「あのホテルにいるんですか？」

——はい。

「七海さんは？」

——市原のパーキングにいます。すぐ先のインターを出て、そちらへ折り返します。

「ちよつと待ってください」

雅人は送話口を手で押さえ、則尾の判断を仰いだ。

「長嶺会長が逢いたいそうですけど……」

則尾は一瞬、目をしかめたが、「逢うしかないな……」と覚悟を決めた。

「大丈夫でしょうか？」

「福田のこともあるしな……でもヤバイことはたしかだから、ボク一人で行くよ」

「一緒に行きますよ！」

雅人は携帯電話に了解の意を告げた。

七海の指示に従い、二人はホテルのエントランスからロビーに入った。出迎えた中年の

支配人は、すでに連絡が届いているとみえ、なにもいわず二人を奥のラウンジへ案内した。

数本の太い柱に支えられた総吹抜けのロビーは、床一面に白っぽい大理石を敷きつめた荘厳な空間だった。中央にはローマ神殿の中庭を彷彿とさせる石造りの水場があり、巨大な女神の彫像が掲げた壺から透明な水が滴っている。吹抜け壁の高所には明かり取りの窓が規則的に並び、射しこむ光が大理石の床で柔らかく拡散している。アイボリーの光彩を有機的に和らげるクラシックの音楽が、どこからともなく響いていた。

ロビーに客の姿はない。奥のフロントにダークスーツの男が一人、無表情に佇んでいる。しばらくして支配人がコーヒーを運んできた。

「ここでお待ちくださいとのことですよ」

慇懃な所作でコーヒーを置き、奥の扉へと消えた。

「扉もエレベータもカードキー式だ。セキュリティは万全らしいな」

支配人が消えたラウンジ横の扉を見ながら則尾がささやいた。

「それにしても客がいませんね」

「一般客はオフリミットなんだろう。きのうだって数回しか人が出入りしてない」

「採算は考えてないんですかね？」

「さあね」

緊張気味に目を伏せた則尾はカップに手をのばした。

「せっかくだからコーヒーをいただこう。おっ、さすがにカップはマイセンだ」

則尾がコーヒーに口をつけたとき、フロント脇にあるエレベータの扉があき、サンングラスをかけた長身の男が出てきた。

「ほら、あれ、俳優の××じゃない？」

則尾が男の素性を付度する。

「たしかに××ですね」

「ああいった連中が大枚を払ってお忍びで滞在する場所なんだよ」

吐き捨てるようにいった則尾は、緊張をほぐすようにフウくと大きな溜息をついた。

それから十五、六分後、七海の姿がエントランスに現われた。

神妙な顔でラウンジまで歩いた七海は、無然とする雅人に悲しそうな笑みを投げかけ、「一緒に来てください」と小声でいった。

二人はいわれるままに立ち上がり、七海の先導でフロント脇のエレベータホールへ歩いた。エレベータの壁にあるセキュリティ装置にカードキーを認識させた七海は、開いた扉に素早く身を入れ、片手で扉を押さえながら「どうぞ」と伏せ目で示した。

おずおずとエレベータの内部に足を入れた瞬間、雅人の鼻腔を例の香りが刺激した。ふいに七海の意識が近くに感じられ、声をかけたい衝動が走った。しかし七海は無表情に階ボタンの上部にある小さな扉をあけ、内部の数字キーを連打した。事務的に動く肩が雅人の意識を冷たく拒絶している。彼女が押したのは関係者だけが知る暗証番号のようである。

エレベータが上昇をはじめたとき、則尾が七海の背に向かって声をかけた。

「最上階はシックレットフロアですか？」

彼女は姿勢を変えず、「はい」と静かに応えた。

エレベータがとまる。

渋いオレンジ色の絨毯を敷きつめた通路だった。両側には一枚板に彫刻を施した扉がい

くつか見える。その通路をまっすぐ歩いた七海は、一番奥の扉のチャイムを押した。すぐにドアが開き、顔を出した屈強な男がなかへ入るように促した。

通された部屋は三十畳近くありそうな空間だった。中央には大きめの応接セットがあり、その正面には50インチを超える薄型テレビが置かれている。背を向けた長ソファーには、ベージュ色のバスローブのようなものを羽織った男の後頭部が見えた。

雅人と則尾が室内に入った瞬間、ソファアの男が振り返った。

「福田！」

則尾が愕然と声をあげた。

「よお」

あっけらかんと応えた福田は、照れるように口もとをゆがめた。洗いざらしの髪や伸びたヒゲのためか、いつものダンディなイメージではなかったが、浅黒く日焼けした顔には疲労も緊張もない。その表情が雅人の緊迫感をほぐした。

「福田さん、ずっとここに居たんですか？」

「好きで居たわけじゃないよ」

福田が大仰に両手を広げたとき、「ここでお待ちください」と二人にソファアを勧めた七海は、男を従えて退室した。

「福田、どうしたっていうんだ？」

扉がしまつたとたん、則尾がふかふかのソファアへどっさり腰を落とした。

「竹崎由布子を見た翌日に、思い切ってこのホテルへ乗り込んだのさ」

「そのまま拉致されたってわけか？ 福田にしちゃあ軽率だったな」

「いや、捕まったというより招かれたって感じだ」

「お気楽なもんだな。それで、長嶺とは会ったのか？」

「二度ね。やつもこちらが持っている情報が知りたかったようだ」

「話したのか？」

「だいたいはね」

「どうだった？」

「感心していたよ。俺たちの動きは竹崎由布子やその妹から聞いていたようだけど。この場所を突きとめたことは褒めていた」

「長嶺たちの動きはボクらの推理どおりだったのか？」

「それに関してはノーコメントだった」

「それにしても一週間だぜ。ここでなにをしていたんだ？」

「なにもしてないよ。服と携帯は没収だが、メシは和洋中とお好みしだい、下着やバスローブも毎日新しいのが用意される。客が寝静まった夜中はジムやプールでの運動もOK、もちろんマッサージも頼み放題、あとはこのスイートルームでテレビを見る。といっても電波放送はオフリミットで、ホテル側が用意した映画やドキュメンタリーのDVDだ。ただし四六時中、護衛がついている。いわば優雅な軟禁状態ってところかな」

「そのかっこうを見ればわかるよ。でも、いつまでこんな状態が続くのかな？」

「二週間程度はおとなしく静養してもらいたいってことだ」

「福田が拉致されてから一週間だから……あと一週間ってことか……なにかわけがあるのかな？」

「たぶんなにかの計画があるんだろう。内容まではわからないけどね」

「ということはボクらも同じ運命ってこと？」

「さあねえ……いずれにしても危害を加えるつもりはなさそうだ。それより則尾たちはどうしてここへ来たんだ？」

「なにいつてるんだよ。福田が連絡不能になったから心配して監視に来たんだよ」

「それにしても、ここへ乗り込むなんていい度胸だな」

「さっきの妹がこのホテルに出入りするのを見たのさ。それで大前くんが彼女に連絡したら長嶺が会いたいってことで、こうなったってわけさ」

「そうか……ということは、すぐにでも長嶺が来るな」

思案げに視線を伏せ、眉根にしわを寄せた福田は、すぐに向かいの則尾に目を戻した。

「それなら二人ともこっちの長ソファへ移って長嶺の席を用意しておいたほうがいい」

その言葉を待っていたようにチャイムが鳴り、七海がカップとポットを載せた盆を抱えて入ってきた。長イスにならんでかしまる三人に「あら」と笑みを投げながら、テーブルの脇に屈み、カップにコーヒーを注いだ。

4つ目のカップにコーヒーを注ぎはじめたとき、再び扉があき、二人の屈強な男が現われた。男たちの背後には、福田と同じバスローブを身につけた大柄な初老の男がいた。

「お出ました……」

福田が隣の則尾に耳打ちする。

見事な白髪 of 男である。浅黒い肌は青年のように張りがあり、歩く姿もどっしりと落ちて着いている。

「はじめまして。長嶺です」

向かいのソファに座った長嶺は白髪 of 頭を丁寧に下げた。則尾は慌てて「あ、私は……」と口ごもって立ち上がろうしたが、長嶺は穏やかな表情でそれを制した。

「聞いていますよ。則尾さんですね。それに、そちらはJITの大前さんですね」

「はい！」

とっさに上体を起こし、背筋を伸ばした雅人を見て、長嶺が目を細めた。

「初対面なのに、こんな格好で申し訳ありません。このホテルに滞在する者はこれを着用する決まりです」

表情は穏やかだが、深く窪んだ鳶色の目は、こちらの心を射るような光を放っている。

「キミもかけなさい」

長嶺は脇に立つ七海に隣のソファを示した。

「福田さんからもいろいろとお聞きしましたが、みなさん、おおかたの事情は知っていらつしやるようですね」

鳶色の瞳が三人を凝視する。

「だいたいのところは……『ドラッカーの限界』も読みましたし……」

則尾が悄然と応える。「ふむ」とうなずいた長嶺は、

「どうでしょう。福田さんにも了解していただいたのですが、お二人とも二日間だけで療養していただけませんか？」

その言葉を聞いた福田が怪訝に聞き返す。

「私のときは確か二週間と良かったですよ。まだ一週間残っていますけど」

「いや、あと二日です。それで福田さんの療養も終わります」

「事情が変わったんですか？」

「その事情は福田さんもご存知のほうですよ」

「……」

無言で吐息した福田に、「どういふことだ？」と則尾が小声でつめ寄る。その様子を見た長嶺は目を細めて含み笑いをもらした。

「おとといですが、ここに官憲が顔を出しました。軽くジャブを打った程度で帰りましたが、あれは福田さんの保険ですね？」

すると福田は大きく息を吐いた。

「隠していたわけじゃありませんが、保険なしで来るほど豪傑じゃあないもので」

ふてくされたようにいう福田に、則尾は「ちえっ」と舌打ちし、

「なんだよ、事前に警察へ連絡してあったのか」

「そうじゃない。こちらからの定期連絡が途切れたら、俺のクライアントがしかるべき手を打つということになっていただけだ」

「じゃあ福田のクライアントは警察だったのか？」

「そんなわけないだろう」

そのとき向かいの長嶺が鼻で笑った。

「ふふふ、ここへ来たのは公安の調査官ですよ」

それを聞いた則尾が再び福田を睨む。

「クライアントは公安調査庁だったのか？」

「バカなこというな。国家権力が民間人にそんなこと依頼するわけがないだろう」

「そりゃあまあ、そうだな……」

割り切れない表情で得心する則尾に、長嶺はまた柔和な表情を向けた。

「福田さんのクライアントに関してはおおよその察しはつきます。たぶん、そのクライアントが公安調査庁に情報をリークしたのでしょうか」

肯定も否定もせず、福田は神妙な表情で長嶺を凝視し、

「解放が早まったのは、保険が有効だったと解釈してよろしいんですね？」

「いや……」

長嶺は軽く首を振り、コーヒーカップに手を伸ばした。

「福田さんの保険のせいではありません。私が時代を読み違えたのです……」

ゆっくりとコーヒーを飲んだ長嶺は、茫洋とした目を虚空に投げ、独り言のように話しはじめた。

「アメリカ独裁の世界情勢が揺らいだ……ようやく時期が来たと確信したんですが、まだ力が残っていたようです……まあ、最後のあがきといえなくもないですがね。あと一年、せめてあと一年の猶予があったら……」

「日本を変える一歩が踏み出せたというわけですか？」

長嶺の独白を遮った福田は、前のめりに体を起こした。

「長嶺さん、もう話してくれませんか。こちらの情報はほとんどお話ししましたよ。しかしあなたは、ご自身のことや、あなたがたの計画についてはなにも話してくれない。こうしてこの二人が来たことで、外部にはもう事件の本質を知る人はいません。私もクライアン

トにはまだ事件の内容を報告していませんし……」

「承知しています。もし報告していたら、公安に情報をリークし、福田さんを救出する活動など起こさんでしょうか」

「その通りです。つまり我々三人を闇に葬れば、秘密は保持できるってことです」

覚悟したような福田のいいかたに、雅人はぎよっとして体を硬くした。非現実的な恐怖が全身を包み、おもわず七海を見た。しかし彼女は寂然とうつむいたままだった。

長嶺が豪快に笑った。

「ははは福田さん、我々は殺人集団じゃありません」

「しかしM Aファンドの調査員……CIA要員は排除したでしょうか？」

「あれは……亀山と白石の弔いと、私自身の直接的な脅威を回避するためです」

「私たちはあなたの直接的な脅威じゃあないということですか？」

「残念ながらそういうことです。あなたがたが我々の計画に気づかずとも、アメリカ政府の意図を受けた公安調査庁は、遅かれ早かれ動いたでしょう。ただ、それが数カ月早まっただけです」

長嶺はまた磊落らいらくに笑い、隣で目を伏せる七海にコーヒーのお代わりを命じた。

「それで、あなたがたは私になにを聞きたいのですか？」

七海が差し出したカップを受け取りながら、長嶺は吹っ切れたような表情でソファに背を預けた。その動作につられ、福田は身を起こした。

「そうですね、まずは長嶺さんたちのプランの実現性について……」

「どういう意味ですか？」

「あなたがたの最終目的は、東アジア政経連合の実現にあるはずですよね？ それなら、すでに中国や韓国などの要人もコネクションをつけているはずでしょうか？」

「それに関してはノーコメントです。福田さんのクライアントのこともありますのでね」

「そうですか……それでは今回の事件の構図のことをお聞きしますが、我々の推察は的を射っていたんでしょうか？」

「お見事、と申しあげておきましょう」

「つまり、あなたがたは半世紀を経てこの日本に新たな革命を起こそうとしたわけですね。それも、かつての学生運動のように思想的・政治的な革命ではなく、経済的な革命を……」

「ほう、革命と評価してくれますか」

「革命ですよ。戦後六十年を経て、ようやく日本は米国の植民地から脱却するんですからね。日本が真の独立国になるための革命じゃないですか？」

長嶺は感慨深い表情で福田を見つめた。

「あなたは日本の現状を把握されているようだ。もう少し早く出逢いたかったですな」

そのあと目線を伏せ、「半世紀……」とつづやくように語りはじめた。

(3)

長嶺、北条、亀山、白石の四名が活動を共にした学生運動は、主に一九六〇年代の日米安保闘争と六〇年代末からの全共闘運動・大学闘争だった。ときの学生運動は、左翼思想を根底にした日米接近の阻止をはじめ、ベトナム戦争など米国の資本支配に関する反旗、

さらには大学の制度改革など様々であるが、体制を変えようとした点においては一定の方向性を示すものだという。

「当時、政治や組織の体制を変えようする主張は、まとめて左翼思想だといわれていた。我々もマルクス思想に傾倒した向きはありましたが、純粹であったことだけは確かです。しかし結果的に社会には受け入れられなかった。いや、受け入れられなかったというより、高度成長期の日本は、資本的な豊かさの実現が最優先の課題であり、人々もそれを夢想していたのでしょ」

長嶺は自嘲するように口をゆがめた。

「でも、あなたがただって資本の中核に入ったじゃないですか」

福田は皮肉を浮かべた口調で返した。

「おっしゃるとおり、現実的な力を手に入れるため、私や北条は資本家を目指し、亀山と白石は政治の世界へ入った」

「日本の経済成長における団塊世代の功績は認めますよ。でも……」

食いさがる福田を長嶺が制した。

「おっしゃりたいことはわかります。現在の日本の政治や経済の暗部をつくったのも我々の世代だと、批判したいんじゃないですか」

「まあ……」

「だから我々は自分たちの責任を果たそうと思ったのです。時機も来たようでしたからね」

「その契機がサブプライムローンに端を発したアメリカ経済の崩壊ですか？」

「サブプライムローンは引き金に過ぎません。今回の金融危機は背後に勝者の自己愛が横たわっているのです。戦後、米国は東西冷戦構造のなかで日本を中ソの防波堤にした。現在の保守政治体制、もつといえれば日本国憲法すらも米国政府の主導であり、米国政府に都合よく機能するものです」

「それに反発して、あなたがたは学生運動を起こしたんでしょう？」

「そうですね。しかし、ご承知のように本流にはならなかった」

「それで今、新たな革命を起こそうとしたのですか？」

福田の言葉に、長嶺は再び感慨深い視線で虚空を見つめた。

「福田さん、米国は八千億ドルもの貿易赤字を抱えています。しかるに、借金を重ねながら消費を続けている。それも莫大な消費です。日本が輸出国として成長できたのは、ある意味、この無秩序な米国の消費と、米国が売りまくる無価値の証券のおかげです。そして日本の政治は米国の意向でしか動けない植民地的な政治になってしまった」

「それで米国支配の排除ですか？」

「いや、独立国として対等な関係になるだけです。米国の経済、つまり金融肥大した経済に比べ、日本や中国は金融経済と実体経済とのギャップは小さい」

「その先にあるのが東アジア政経連合ですか？」

「今後の世界経済は、米国、欧州、東アジアのブロックに分け、それぞれがブロック内の経済と内需を立て直し、それぞれを基軸にしたグローバル化を構築するしか道はないでしょう。もとより世界の経済の発展はそれを望んでいた。しかし米国の一国主義的な金融・経済がそれを阻んでいたのです」

そのとき則尾が嬉しそうな声で問いかけた。

「長嶺さん、その米国への仕返しとしてM Aフアンドを騙し取ったという筋書きですね」
「はは、騙し取ったというのは語弊がありますな。多少ご返済願ったというのが正しい」
「そこまでいった長嶺は急に目もとへ暗い影を忍ばせた。」
「もつとも、そのおかげで亀山や白石は志を遂げられなかった……」
「でも米国の報復は予想できたんじゃないんですか？」
「想定外だった、というのが正直なところですね。予想に反して米国政府の焦りかたは異常だった。つまり、あの国も我々が考える以上に事態の深刻さを察知していたということでしょう」

すると福田が「なるほど」と感心したようにうなずいた。

「今回の経済危機は、一九二九年の世界恐慌どころではないという認識ですね」

「そうです。あの恐慌の要因は英国の世界経済支配が崩れたことによるものだった。米国はニューディール政策で乗り切り、世界経済の覇者に登りつめた。しかし今回の経済危機は米国内部のウルトラリベリズム、つまり行き過ぎた自由主義が貪った夢想のマネーゲームですよ。その夢から覚めた米国は、もう成す術がない。術がないというより、自らドル安を誘導して貿易赤字を少しでも減らす以外の知恵がないといったほうが正しいでしょう。しかし日本は違います。成す術がない米国を相手に、きちんとした独立国としての自治を回復し、アジアに目を向けるチャンなのです」

「でもアジアの国々、とくに中国や韓国などは反日感情が高いでしょう？」

「その一因こそ、日本が米国の飼い犬でいる事実にあるとは思いませんか？」

「でも政権が変わって日米の連携が弱まったからこそ、中国やロシアがこぞとばかりに領土問題に踏み込んできたんじゃないですか？ とくに中国のやりかたは深刻ですよ」

「短期的に見ればそうですね。品格のない反日教育の成果というべきでしょう。しかし、学問を積んだ中国国民は我々が考えるほど愚かではない。どんなに政治的な水圧を高めようが天安門の炎を消し去ることはできません。そのことは中国政府自信が一番知っているはずです。日本が米国と対等の独立国になり、アジア民族としてアジアに目を向ければ、多少時間はかかるかもしれませんが、反日感情よりアジア同胞民の意識は勝るはずですよ」

「そのための一歩が食料自給率アップと新エネルギー開発というわけですか？」

「方法はいろいろあると思いますがね、我々が現実的に着手できる分野がそこだったに過ぎません。日本では減反政策が四十年も続けられてきた。減反の保証金だけでも七兆円ですよ。しかし、この政策は単に米価の安定政策だけが目的ではありません。むしろ米国の植民地たる日本が、自国の農業生産性を否定し、米国主導のグローバル経済によって与えられる食に満足させられてきたことが要因なのです。そのおかげで、現在、日本全国には四十万ヘクタールもの耕作放棄地が生まれてしまいました……いや、生まれたという表現は適切ではありません。四十万ヘクタールの耕作地が死滅したと表現するほうが正しい。その再生を訴えた有識者もいるにはいたが、日本の政府、そして大半の学者やエコノミストは農業の活性化を問題にしなかった……こうした現象は、この問題に限ったことではありませんがね」

「確かに現在の経済危機に対して各国政府は無力の状態ですね。あなたがおっしゃる通り、ウルトラリベリズムの発想しがなく、政治が経済に対して受身だったせいかもしれません。日本の農業政策はその波をもろにかぶった最大の被害者だと思います。私も、今回の

経済危機でウルトラリベリズム発想はその無力さを思い知ると思います」

「福田さん、さつきもいいましたが、あなたとはもっと早く逢いたかったですな」

長嶺はおもむろに冷えたコーヒーを口にした。そして深い溜息をつき、

「時機を読み違えた……そして私が米国の焦慮の深刻さを読み違え、同時に日本政府のだらしなさを読み違えた……それだけです」

そういつて再び自嘲的に「ふふん」と鼻を鳴らした。

「長峰さんはこれからどうするおつもりですか？」

コーヒーを口にした福田はカップをソーサーに戻しながら長嶺を凝視した。目をひらいて「ふん」と小さくうなずいた長嶺は、

「いざれわかります。まあ、あと二日、ここで療養してください」

「もうひとつ教えてください。亀山氏と白石氏はCIAによって排除され、今、長嶺さんも脅威を感じてここにいる。でも北条氏はどうなんですか？ 彼も長峰さんの計画の首謀者でしょう？ それなら彼にも脅威が迫っているんじゃないですか？」

「もうご存知と思いますが、北条も北嶺観光開発の設立に資本を提供しています。しかし、それだけです。ファンドに関しても彼はノータッチですよ」

「それだけですか？」

「どういう意味ですかね？」

「私が調べたところによれば、今、日本政府は低炭素社会への移行を政策に掲げています。そのキーを握るのが自動車産業や石油関連産業ですよ。現に大手石油会社は新エネルギー開発計画を発表し、太陽光発電施設や太陽電池の巨大工場建設計画、それに燃料電池などの事業化に乗り出しているじゃないですか。北条エナジーもその一員です。しかも、かなりの具体性をもってバイオ燃料開発やメタンハイドレードの開発を進めている」

「ほお、よく調べましたね」

長嶺は興味なさそうな表情でコーヒーを口に運んだ。

「長嶺さん、北条エナジーには政府のバックアップがあるんでしょう？ それに米国も日本の環境技術には注目している。ことにバイオエタノールの生産技術開発やメタンハイドレードの掘削技術は、ある意味で米国の石油依存体質を打破する可能性を持っている。だから米国政府も日本政府も今のところ北条エナジーには手が出せない……違いますか？」

「どうでしょうね。想像は勝手ですがね」

思わせぶりに福田を睨んだ長嶺は、やにわに立ち上がった。

「それでは、あとのことは竹崎からお伝えします」

そういうとドアに控えていたボディガードの一人を伴い、さっさと部屋から出て行ってしまった。

「大前さんと則尾さん、お二人の持ち物と携帯電話をお預かりします。あとでホテルのバスローブをご用意しますのでお着替えになってください」

「竹崎さん……」

雅人は携帯電話を渡しながら七海にいった。

「オレを騙だましていたんですね」

七海は表情を強たばらせた。

「そんな悲しいことをおっしゃらないでください……」

「でも騙していたんでしよう？ シノウミだって、あなたは知っていた。でも知らないふりをしてオレに近づいた……もしかしてカシオペアの事件もあなたが動いたんじゃないですか……違いますか？」

「もういわないで……」

「いや、いわせてください。あなたはこちらの動きを探るために、そして、こちらの情報を引き出すために、思わせぶりの態度でオレに近づいたんですよね」

「大前さん……」

「そうだとおっしゃってください。それでなけりやあ、オレは……気持ちの整理ができない……」

しかし七海は潤んだ目で雅人を見つめた。

「大前さん、こんな状況でなく、あなたと出逢いたかった……」

「やめてください！」

雅人は思わず激昂した。

「まあまあ大前くん、もういつてもしようがないじゃないか」

隣から則尾が宥める。

「大前くんの気持ちもわかるけど、こうなった以上、おとなしく従うしかないよ」

「でも則尾さん……」

「その話はあとにしよう」

則尾がそういったとき、長嶺とともに消えたボディガードの一人がホテルのバスロープを手にして戻ってきた。七海はそれを機に「ごめんなさい」と小声でいい、二人の携帯電話を手にして逃げるように部屋から出て行った。

「さてと、これからどうしようか？」

七海に続いてボディガードが部屋から消えたとき、則尾があっけらかんといいながら、先ほどまで長嶺が座っていたソファに体を移した。

そんな則尾を見て、福田は苦い表情で口を尖らせた。

「どうするって……どうしようもないよ。なにをするにも監視つきだからな」

「でも監視はいなくなったよ」

「ちゃんとドアの外に二人いるさ。嘘だと思ったら出てみろよ。それに、この階からの移動はエレベーターしかないし、それを操作するには暗証番号が必要だ。窓から逃げようにも十階じゃあな。それに窓はロックされていてあけられない」

「だろうな……福田がなにもできなかったんだからな」

「まあな。でも二人が来たおかげでいくらか長嶺の話が聞けたから、それはそれで成果というべきかな」

安穩という福田に、則尾はふいに訝しげな視線を送った。

「福田、おまえのクライアントって誰だよ？」

「今はいえない。盗聴器があるかもしれないから……」

「でも長嶺はわかっているような口振りだったぜ」

「長嶺の言葉じゃないが、想像するのは勝手だ。それよりも、せっかく話が聞けたんだから、あと二日間のあいだに今回の事件をもう一度整理してみようか？」

「そうだな、復習の時間に宛てるしかなさそうだな」

則尾は無然とうなずきながら雅人を見た。

「ところでボクらはフリーだからいいけど、大前くんは宮仕えだから、少なくとも二日間は無断欠勤になっちゃうね」

「しょうがないですよ……」

一瞬、F T課や手塚部長の混乱が脳裏をよぎる。しかし雅人の意識は、絶望感に喘ぎながら、破壊された七海の幻想の残渣を未練がましく探していた。

それから二日間、豪華な食事やジャグジー、あるいは望みどおりに振舞われる美酒など、ある意味、優雅ともいえるべき時間を送りながら、三人は今回の事件の全容を整理した。といつても、ほとんどは福田と則尾の推理であり、雅人は悄然とその脇に座し、二人の推論を聞くしかなかった。

その間、絶えず三人のボディガードが付き添った。長嶺も七海も姿を見せなかったが、ボディガードの顔ぶれは何回か変わった。

福田と則尾の推理によると、CIAがまず亀山や白石を排除したのは、CIAのそうした動きを政治的に排除されなくなかったためであり、それが効果を発揮し、日本の政府筋も米国の意向に従って事件を黙殺した。亀山と白石の死因が自殺と事故に落ち着いたのも、背後にあった米国の圧力によるものに違いない。

オコタンペ湖で死んだMAファンドの調査員、つまりCIAのアジア要員は、長嶺の報復によって排除されたが、それすらもCIAの動きを糊塗するために自殺とされ、さらには、その要員から長嶺の潜伏場所を記したメモを渡され、確認に向かうカシオペア車内で殺害されたCIA要員も、自殺ということまで蓋をされてしまった。

「かつて純真な心で日本の革命に挑み、それを果たしえなかった団塊世代が、米国経済の凋落を機に、改めて第二の革命に挑んだ。しかしその動きに関する米国の脅威の意識は、想像していたよりはるかに深刻だったということだ。加えて日本政府も、長嶺が思っていた以上にだらしなかったというわけだな」

福田は溜息まじりにいったが、則尾はまだ納得できないといった表情で、

「長嶺は時機が早すぎたともいっていたぜ。もう少し遅ければなんとかなったのかな」

「たぶん今以上に米国の政治や経済が混乱すれば、米国も自国のことで手一杯になり、極東にまで意識がまわらなかつたってことかもしれない。そうなれば米国の極東戦略も多少は変化する可能性がある。早すぎたというのはそのあたりじゃないかな」

「でも原油価格も安定してきてるし、サブプライム問題やリーマンショックによる米国経済の打撃はそれほど深刻じゃないのかもよ。むしろアジアやヨーロッパのほうが深刻なんじゃないか？ EUのなかには破綻寸前の国家もいくつかあるようだしな」

「則尾……」

福田は呆れ顔で則尾を論じた。

「そりゃあ日本の官僚や政治家の考えと同じだよ。米国の凋落の根を甘く見すぎている」「じゃあ米国経済の傷はもっと深刻だったっていの？」

「長嶺もいってたが、米国は腐った金融商品を売りまくり、同時に腐った利潤を食い続けてきたんだぜ。完全な食あたり状態、いや、ひどい食中毒だ。でも、やつらはいよいよ以前からそれを自覚しはじめていたのさ。例のイラク戦争やアフガンのテロ組織撲滅だって、

結局は自国のエネルギー政策や正義なんかじゃなくて、国外に緊張の種を植えて米国政府の存在感を誇示し、同時に国民意識を政権支持に向かわせるための、とりあえずの応急処置に過ぎないんだよ。国民の意識を国外の敵や脅威に向け、内政の瑕疵を糊塗するのは政治の常道だ。中国の反日教育も北朝鮮の対日・対米姿勢も、結局はそうなのさ」

「つまり自分たちの食中毒症状を隠すためか？」

「そうだな。戦争という緊張感があれば、米国の地位やドルは安泰だ。少なくとも破滅的な症状を世界から隠しておける。長嶺は『ドラッカーの限界』のなかで、現在の米国政治経済の出発点を先の戦争にしているぐらいだからね」

「第二次世界大戦に？」

「それだよ。ただし則尾のその呼びかた自体が錯誤だと痛切に批判している。われわれが第二次世界大戦と呼ぶこと自体に、米国の意図が隠されていると書いている」

「どういうことだよ」

「つまり、一般的に第二次世界大戦と呼ばれる戦争は、実は、ヨーロッパとアジア極東でそれぞれ違う理由による戦争が連鎖的に勃発したに過ぎないというんだ。ところが極東とヨーロッパの中間に立地する米国は、その機会に両方のエリアの覇権を握ろうとして、両地域に軍隊を送り出した。でもな、こうした二面作戦は戦争のタブーといわれているんだ。つまり、最初から負けが濃厚な愚かな作戦ってわけだ。こんな作戦に国民が黙って従うと思うか？」

「でも結果的には両地域へ軍隊を出したじゃないか」

「そうするために、米国は日独伊をファシズムという概念でひと括りにし、民衆をファシズムから解放する聖戦だと流布して国民を納得させたのさ。結果は、ラッキーにも両方で勝利した。しかもだ……戦後、先進諸国は焼け野原と化したのに、米本土は無傷の状態だぜ。それが日中戦争と第二次ヨーロッパ戦争後の、アメリカによる政治経済の専横を生み出し、世界が苦々しく容認した独善を可能にした……とくに一九八五年のプラザ合意によるドル安容認と、それに続く東西冷戦の終結以降、米国の専横と独善の膿は、水面下でどんどん広がっていった。それが現在の政治経済状況の現状だと長嶺は書いている」

「なるほどね……そういうわれれば納得できる論理だな……」

素直にうなずいた則尾は、

「でも……今回の長嶺の動きに対して米国の焦りは想定外の大きさだったんだろう？ 長嶺はこれからどうするんだろうな？」

「現状では、彼の構想を進めるのは無理だと思う」

「といって、しゃあしやあとした顔で北嶺資源開発を運営できないだろう？」

「どうかな。また別の作戦があるのかもしれないし……」

「でも、オコタンペ湖やカシオペアの事件の首謀者だろう？ そのままってわけにはいかないんじゃないか？」

「あれは自殺と発表されている。裁判でいくなれば一事不再理のようなのさ」

「一事不再理？」

「つまり、一旦判決が出た事件に関しては、同じ事件で同じ人間を裁かないってやつさ。警察発表だって、それと似たようなもんさ。一旦出した結論は、なかなか翻らない。だから検察や政府だって、自殺と発表した以上、あの事件で長嶺を裁くことはできないはず

だよ。ただしC A Iの活動はまだ続いている。といって長嶺もこのままこのホテルに身を隠してはいられない」

「なにかの動きをするってことか？」

「当然さ、あと二日で俺たちを解放するんだぜ。それを前提に自分の計画を話した以上、なにか手があることは間違いない。まあ、お手並み拝見ってところかな」

「本当に解放してくれるのかな？」

「たぶん解放するはずだ。もし俺たちを始末するならとくにそうしているはずだしな」

福田と則尾は勝手にそう結論づけたが、雅人は不安だった。

「福田さん、カシオペアの事件は竹崎姉妹の犯行なんでしょうか？」

「どっちが実行したかはわからないが、おそらくは……」

「それも、一事不再理って法律が適用されるんですか？」

「事件の進捗状況によるだろうな」

「本当に彼女らにそんなことができたんでしょうか？」

雅人はどうしても納得できなかった。福田は一瞬、「うゝん」といいよんだが、

「大前くん、以前もいったが、C I Aの要員に警戒されずに接近できたのは、あの姉妹……」

……というより妹のほうだと考えるしかない」

「でも妹だって長嶺の関係者ですよ。C I Aともあろうものが、そんなことも読めなかったなんて……」

すると福田は憐れむように雅人を一瞥した。

「酷ないいかただが……大前くんにだって彼女が長嶺の関係者だと知っていたはずだぜ」

「……」

言葉を失った雅人は、呆然と窓の外に視線を投げた。

真夏の太陽に、房総の低い山なみが稜線の影を刻み、背後から不気味な積乱雲が、淡いブルーの空を覆いはじめている。梅雨明けにはまだ早い、湧き上がる雲はまるで雷雨を予感させる暗色を忍ばせている。

雅人の心のなかで、その不穏な色が、七海の幻想を覆う暗い影と重なっていた。